

5 慢性膀胱炎における排尿痛に対し、 猪苓湯合四物湯を使用した症例

北海道立子ども総合医療・療育センター 小児泌尿器科¹⁾、
札幌医科大学 感染制御・臨床検査医学講座²⁾

上原 央久¹⁾、村中 一平¹⁾、高橋 聡²⁾

症例は10歳女児。脂肪脊髄髄膜嚢腫術後の神経因性膀胱に対し、オキシブチニンの内服と清潔間欠自己導尿を施行していた。9歳時の透視下膀胱内圧測定では最大膀胱容量262ml/5cmH₂Oと低圧畜尿であり膀胱complianceも保たれていた。以前より膿尿を伴う導尿時の疼痛を主訴とする膀胱炎を繰り返していたが、直近の半年間で計10回の膀胱炎をきたした。尿培養検査からはESBL産生*Klebsiella pneumoniae*や大腸菌が繰り返し検出されたため、抗菌薬はFRPMやST合剤が使用されていた。抗菌薬による加療後もすぐに再発を繰り返すことから慢性膀胱炎と診断し、直近の膀胱炎の際にST合剤と同時に猪苓湯合四物湯を処方した。直近の尿培養検査からはESBL産生大腸菌が検出されたため後日入院の上MEPMによる加療を施行した。

猪苓湯合四物湯の投与から1ヶ月以上経過したが膀胱炎の再発は現時点では認めず今後も同薬剤の継続予定である。膀胱炎に対しては抗菌化学療法の外に猪苓湯や猪苓湯合四物湯が使用されており文献的考察を踏まえ報告する。